

やすだ のぼる
安田 登
 能楽師（下掛宝生流：ワキ方）
 寺子屋 講師 （阿弥陀寺）
 こどもおばけ合宿 講師 //

主著に『論語』『あわいの時代』『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』
 『能 650年続いた仕掛けとは』他多数。

こままたとき 親鸞聖人の 鳥



イラスト 中川 学

「劫濁のときうつるには」

は何もできずにただただ茫然としていました。人々を救うべき仏教は、当時は国家宗教でしたの

『平家物語』で語られる源平の合戦をはじめとする、戦乱や争乱の時代。人々は常に死への恐怖と暴力へのおそれを感じていました。また、飢饉も頻りに起り、多くの餓死者の死体があちこちを転がっていました。そして、現代の新型コロナウイルスのような疫病も流行し、人々

親鸞聖人が生きられた平安末期から鎌倉初期は大変な時代でした。『平家物語』で語られる源平の合戦をはじめとする、戦乱や争乱の時代。人々は常に死への恐怖と暴力へのおそれを感じていました。また、飢饉も頻りに起り、多くの餓死者の死体があちこちを転がっていました。そして、現代の新型コロナウイルスのような疫病も流行し、人々

で、庶民の方を向いていませんでした。いかに国家を安定させるか、あるいは一部の貴族のためになるかばかりを考えていて、苦しんでいる庶民なんか知るもんか、という態度でした。

それは変だろ！私たち庶民が苦しんでいて、何が仏教だ！と立ち上がったのが浄土宗の開祖である法然上人と、その法然上人を慕ってその門に入り、そして後に独自の法門を開かれた親鸞聖人でした。

そのような時代に生きてた親鸞聖人は、御和讃で次のようにその時代を詠われています。

最初「劫濁」というのは、飢饉や疫病などの天災や争乱などによって、世の中や社会が正常、清浄でないことをいいます。まさに、親鸞聖人の時代

劫濁のときうつるには有情やうやく身小なり五濁悪邪まさるゆゑ毒蛇悪竜のごとくなり

まず「深呼吸」

「龍月夜」

「あはれ（あわれ）」とは「ああ」というため息からできた言葉です。そして、ため息とは「溜めて」、そして長くはき出す息をいいます。

感情を表す語はひとつも使われていません。風景しか歌っていないのです。それなのに、もの悲しさを感じる。それは、感情表現などなくとも、私たちは風景の中に情緒を感じることができらうです。

「あはれ（あわれ）」とは「ああ」というため息からできた言葉です。そして、ため息とは「溜めて」、そして長くはき出す息をいいます。

「あはれ（あわれ）」とは「ああ」というため息からできた言葉です。そして、ため息とは「溜めて」、そして長くはき出す息をいいます。

感情を表す語はひとつも使われていません。風景しか歌っていないのです。それなのに、もの悲しさを感じる。それは、感情表現などなくとも、私たちは風景の中に情緒を感じることができらうです。

霞ふかし。春風そよふく、空を見れば、夕月かかりて、にほひ淡し。二、里わの火影も、森の色も、田中の小路をたどる人も、蛙のなくねも、かねの音も、さながら霞める龍月夜。

間にか、日本人の息は浅くなつてしまつています。そして、こんな「劫濁のとき」にはより浅くなります。

まずは、「吐く(呼)」「吸う」という深呼吸をするのを習慣にしてみてください。

妬みやそねみ

さて、こんな時代には、人々の心がまるで毒蛇や悪竜のようになってしまふと親鸞聖人はおっしゃいます。

毒蛇や悪竜のような心というのはどのような心でしょう。ひとつは妬みやそねみです。

ちよつとも自分よりも優位に立っている人を見ると嫉妬してしまふ。あるいは、得をした人を見ると「ズルい」と思つてしまふ。そのような心を持ちやすくなると親鸞聖人はおっしゃいます。

これを最初に戒めたのは聖徳太子でした。しかし、聖徳太子が嫉妬を戒めたのは政治家や役人

に對してでした。それによつて、自分よりも才能や知識の優れた人を排除してしまふ可能性があるからです。そうすると役所や国家にいい人材が集まらなくなつてしまひます。聖徳太子はそれを戒めました。

嫉妬がよくないのは、むろん役人だけではありません。これで思い出すのは二宮尊徳の話です。小学校の校庭に薪を背負つて立つ二宮金次郎さんですが、彼がしたのは主に地域開発でした。再生不能と呼ばれた地域を二宮尊徳はいくつも再生しました。

「この地方をなんとかしてほしい」と言われると、二宮尊徳は最低十年はほしいと言いました。それは彼がしたいことが「心田開発」、すなわち村人の心を変えていくところからだからです。

お金をかけてシステムを作るのではなく、人々の「心」を開発する、それが彼がしたことでした。すなわち、ひとりひとり

の「心」の中にある天命を探し出し、それがうまく働くようにする、そうすればその地域は自然によくなる、というのが彼の考え方であり、方法論でした。

「天命」というのは、その人が生まれつき持っている本然の性です。それを探し出し、そしてそれが十全に動くように手助けをするのが二宮尊徳の方法でした。だから最低十年はかかるのです。

怠惰という天命もある

しかし、人々の天命を探索することは、人々の「やる気」を引き出すというのとはちよつと違います。「天命」はひとりひとりが違います。たとえば「やる気がない」というのもひとつの天命です。

日本には三年寝太郎の話もあります。三年間眠り続けた怠け者の男が、突然起き出した末に灌漑など、とてつもなく大きいことをするという話です。これは三年の人もい

るし、五年の人もいる。十年の人もいるし、五十年の人もいる。そして、大きなことをする前に亡くなつてしまふ人もいます。「大器晩成の早死に」です。いま怠惰だからといって責めてはいけません。二宮尊徳は、そのような目で人々を見ました。

二宮尊徳が開発を依頼された村に、本当に怠惰な人がいました。人々の「心田」は開発され、村もどんどんよくなつていくのですが、彼だけは全然ダメ。

ある日、二宮尊徳から派遣された役人が彼の家に行きました。そんな男の家ですからポロポロですが、トイレを借りたのですが、大便をしているときにトイレが崩れてしまったのです。怒つた役人は男をぼこぼこに殴ります。男は「役人にこんなことをされた」と二宮尊徳に文句をいいます。二宮尊徳は「それは悪かった。数日待つてく

れ」と言いました。そして、彼の家のトイレはもちろんのこと、家すべてを新しいものに作り替えたのです。

こんなことをしても、村人の誰も「ひとりだけズルい」と言わない。それこそが二宮尊徳の「心田開発」だったのです。

クレームをやめてみる

毒蛇や悪竜のような心のもうひとつのあらわれは「クレーム」です。人に罰を与えたくないので、たとえばレストランに行つて、ひどい扱いを受ける。誰でも頭に來ます。文句のひとつも言いたくなりません。

でも、ちよつと想像してみましよう。今日、あなたが宝くじで三億円、当たつたとします。あ、ちゃんと想像してくださいね。そうしたら、ちよつとくらいひどい扱いをされても、ここにこ笑つて「いいよ、いいよ」と言いませんか。

クレームや文句は相手のせいだと思つていますが、実は自分の精神状態によるところが大きいのです。悪いことは悪いんだから文句をいつても当たり前、放つておいたらもつとひどい奴になるから親切心で言つてゐるんだ。私たちはそう思つてしまひますが、それはいまが「劫濁のとき」だからです。やさしい社会にクレームはありません。

そして、他人にクレームを言い続けると、自分もクレームを言われる人間になります。そして、世間は「クレーム社会」になつてしまひ、やがてクレームは言われないうにということばかりを気にするようになります。肩身が狭くなる、「有情やうやく身小なり」ですね。そんな社会から脱け出す一歩は自分から。クレームをやめて、隣の人にちよつと優しくしてみるのはいかがでしょうか。親鸞聖人は、そんな風におっしゃつてゐるように思えます。